不規則抗体スクリーニング検査の検査法の検討

◎門脇 未奈[1)]、佐藤 亜希子[1)]、奥山 馨[1)]、佐藤 修子[1)]
地方独立行政法人 山形県・酒田市病院機構 日本海総合病院[1)]

【目的】
溶血性副作用や胎児・新生児溶血性疾患の原因となる臨床的意義のある不規則抗体を検出するためには間接クームス法（IAT）が必須である。一方、酵素法は非特異な反応がみられることから実施する意義は低いとされている。当院は、不規則抗体検査をバイオビュースクリーン J を使用して LISS-IAT（LISS 添加法）と酵素法（Ficin 法）の 2 法を実施している。今回、高感度といわれている 0.8%セルスクリーン J-Alba-を使用した LISS-IAT（LISS 浮遊法）の導入とそれに伴い酵素法省略が可能であるか検討したので報告する。

【方法】
全自動輸血検査機器 Auto Vue Innova（Ortho 社）にて LISS 浮遊法、LISS 添加法、Ficin 法を、比較対象として PEG-IAT（PEG）を試験管法で実施し、各検査法の凝集の一致率、強度、抗体検出の差を比較した。検討数：100 検体（陽性 40、陰性 60）

【結果】
PEG との一致率は LISS 添加法＋Ficin 法で 65%、LISS 浮遊法で 86%であった。3 法間で結果が不一致であった症例は 17 件。内訳は抗 E 3 件（Ficin 法のみで陽性）、抗 Fy^b1 件（LISS 添加法で陰性、LISS 浮遊法と PEG で陽性）、冷式抗体や非特異反応 13 件（LISS 添加法＋Ficin 法で陽性、LISS 浮遊法と PEG は陰性）であった。臨床的意義のある抗体の凝集強度は PEG≧LISS 浮遊法＞LISS 添加法であった。

【考察・結語】
LISS 浮遊法は、PEG に近い結果を得ることができ、臨床的意義のある抗体の検出感度を上げることが可能であると考えられた。また、酵素法で問題となる冷式抗体や非特異反応に対する追加検査を排除することができ、業務量、コスト面をみても効率的な検査が可能になると考えられた。

連絡先：0234-26-2001（内線 4250）